

12. 未成熟ミエロイド系抑制性細胞の起源ならびに腫瘍浸潤機序に関する研究

解剖学 (マクロ)

沢登祥史

【目的】担癌状態で誘導されるミエロイド系抑制性細胞 (MDSC) は, *in vitro* での検討で T 細胞応答を抑制することが報告されており, 癌の免疫回避の機構のひとつであると予想されてきた. しかしながら, この細胞集団は①ヘテロな集団と思われるにもかかわらず含まれる細胞サブセットの詳細な報告はなく, ②起源や誘導の動態に関する知見も乏しく, さらに③ *in vivo* での機能に関する直接的な報告もなかった. これらの疑問を解消するため我々はマウス腫瘍モデルを用いて解析を行った.

【対象・方法】マウスに株化した腫瘍細胞を皮下接種し, 脾臓および腫瘍で増加する CD11b⁺ Gr-1⁺ 細胞を MDSC として, 上記の 3 項目に関する解析を行った.

【結果】形態および表面分子発現パターンから腫瘍浸潤 MDSC は多数のマクロファージ, 好中球, およびごく少数の好酸球を含むことが示唆された. 動態に関して, マクロファージ画分は 24-48 時間で, 好中球画分は 48-96 時間で入れ替わっていることが示唆された. ケモカイン受容体 CCR2 の欠損により腫瘍へのマクロファージ画分の浸潤は劇的に低下したが, 腫瘍内および腫瘍所属リンパ節の T 細胞数は増加せず腫瘍の増殖速度に変化は見られなかった.

【考察】これまで MDSC として扱われてきた細胞集団が主にマクロファージおよび好中球の混合であり, 比較的早くターンオーバーすることが明らかとなった. 腫瘍浸潤 MDSC のマクロファージ画分が消失しても腫瘍の増殖速度は変わらず, *in vitro* における報告から予想されたマクロファージや MDSC を標的とした免疫抑制解除は単純には成立しないことが示唆された.

13. ウイルス性疣贅に対する局所免疫療法

皮膚科学

濱 直人, 簗持 淳, 吉田隆洋, 並河弘美,
五月女聡浩, 濱崎洋一郎, 山崎雙次

【目的】難治性ウイルス性疣贅に対し SADBE 外用療法の有効性を検討した.

【対象】当科外来を受診した, 液体窒素凍結療法などの通常の疣贅治療に抵抗する難治の多発性ウイルス性疣贅症例

【方法】まず 2% SADBE アセトン溶液を上腕に塗布し感作を試みる.

感作成立の目安として Spontaneous flare up 反応を確認し, 疣贅部に 0.01~0.05% SADBE アセトン溶液を 2~4 週に 1 度のペースで繰り返し外用する.

【結果】全例著効した.

【結論】多発する難治性ウイルス性疣贅に対し, 患者の疼痛が少なく有効性の高い治療法と考えた. 顔面頸部に多発する疣贅を SADBE で治療した報告は少なく, 接触皮膚炎による搔痒感や炎症後色素沈着など副作用の説明を十分にし, 同意を得た上で施行するなら選択肢の 1 つになると考えた.